報　告

第47回日本作業療法学会

産業医科大学病院　飯田　真也

1．はじめに

第47回日本作業療法学会は2013年6月28日(金)～30日（土）に大阪国際会議場にて開催された。地域に暮らす～生活を支える作業療法～というテーマのもと特別講演やシンポジウムに加え、1,000題を超える一般演題があり参加者も3日間を通じて約6,000人の参加があった。

2．特別講演

特別講演は鈴木恒彦氏（南大阪小児リハビリテーション病院）がリハビリテーションにおける医療と福祉の連携について講演され、両者間では医療サービスにより福祉が成立し、福祉サービスにより医療分野が活性化される補完関係にあるため必然的に両者の連携は欠かせないと述べられており、大阪での包括的リハビリの実際の取り組みや対応を紹介された。今後さらなる在院日数の短縮化等の動向により急性期から自宅生活へ復帰される方も増加していくことが予想され、個人因子や環境因子も考慮し当院のような急性期からも福祉分野との関わりを深め、地域につなぐ作業療法としての役割も重要となってくるのではないかと思われた。

3．シンポジウム

今回WFOT国際シンポジウムに加え就労支援や自立支援、認知症、発達の作業療法など、12テーマにのぼるシンポジウムが企画された。WFOT国際シンポジウムでは日本、台湾、フィリピン、韓国からそれぞれシンポジストとして各国での作業療法の現状と作業療法士の実践領域の拡大に向けた取り組み等の紹介があった。世界の作業療法士数はこの10年間で2.5倍に増加しており、医療現場だけでなく福祉、教育、司法分野など様々な実践の場で活躍されており、実践の場の多様化が確実に進んでいるとのことであった。しかし東南アジアにおける作業療法士の数としては日本が充実しているかのように見えるが必ずしも実践領域が拡大しているとは言い難い状況であり、今回の国際シンポジウムを通じて作業療法士として可能性を広げ様々な視点を考える良い機会となった（図1）。

図1　シンポジウムの様子

その他シンポジウムでは「作業療法士がかかわる就労支援」「難病・重度重複障害者への作業療法」「がんとともに生きる人を支える作業療法」など、深刻な障害を受けた場合の支援として、地域で出生から終末期まで1人の人生を見守ることの大切さを考えさせられ、将来を見据えた作業療法を提供できる連携を作ることの重要さを述べられた。特にがん患者に対するシンポジウムでは当該患者だけでなく見守る周りの家族に対する対応としてのグリーフケア（grief care、悲嘆回復）の重要さを再確認させられる内容であった。

産業医科大学病院
〒807-8555　北九州市八幡西区医生ヶ丘1-1

４．機器展示

機器展示では様々な福祉機器から治療用として使用する訓練道具、スプリントなど多くの企業の参加があり展示者と来場者の間で活発でより具体的な意見交換がなされていた。初めて目にするものも多く、実際に体験等も行いながら説明を受けることができ、それぞれの分野でどんなことが話題になっているのかを知ることができた（図２）。

図２　機器展示会場の様子

５．おわりに

今回日本作業療法学会に参加させて頂き、様々な地域からの病院、施設間の情報交換、交流が活発に行われている光景を目の当たりにし、自身としても同じ関連の取り組みをされている方々との意見交換を行うことができ非常に有意義な時間を過ごすことができた。またメインテーマである地域に暮らす～生活を支える作業療法～という観点から作業療法士として地域を見据えた関わりを再考させられる良い機会であった。さらに一般演題においても作業療法の領域である片麻痺患者における上肢機能に対し、テレビ等でも取り上げられている経頭蓋磁気刺激や上肢ロボット支援訓練など最先端の治療の発表も多くあり、今後の臨床において大変役に立つものであった。

最後に、来年横浜にて日本作業療法学会に加えアジア初の世界作業療法士連盟の学術大会が開催されることとなっている。各国の取り組みを知り、国の実情を考慮した実践領域の拡大を考える良い機会となると思われ、今回特別講演やシンポジウムで学ばせてもらった地域に暮らす作業療法士としてのあり方を念頭に置き、さらなる視野の拡大を目指す機会にしたい。